



フリードリッヒ大王時代のポツダム

田中 辰明

お茶の水女子大学名誉教授・工博

はじめに

西郷知一氏が欧州へ公用出張に赴いた昭和初期の頃、写真機など手軽に持ち歩ける時代ではなく、旅人はその土地の絵葉書を手土産として購入して帰国するのが一般的だった。彼もまた、ベルリンやポツダムで手に入れた絵葉書を持ち帰り、それが上由美子様の知人によって大切に保管されていた。今回、筆者はこの絵葉書を拝借し、その時代のポツダムについて考察することとなった。

ドイツの歴史において、ポツダムの名は特にフリードリッヒ大王と共に語られることが多い。プロイセン王国の発展とともに、ベルリンはその首都としての地位を確立していったが、その裏でフリードリッヒ大王の指導力が光った。彼はその在位期間中に、多くの宮殿や建築物をポツダムに築き上げ、その影響は今もなお続いている。筆者は2024年7月、フリードリッヒ大王が建設した建物群を巡るためにベルリンに滞在し、そこからポツダムへ何度も足を運んだ。その結果、4回にわたりポツダムを訪れることとなった。絵葉書に描かれた建物が現在どうなっているのかを調査し、現在の姿を写真に収めることに成功した。

ポツダムには、フリードリッヒ大王の命によって建設されたサンサーシ宮殿をはじめ、新宮殿やオランジェリー宮殿など、数々の歴史的建造物が点在している。サンサーシ宮殿は、フリードリッヒ大王が1745年から1747年にかけて建設した夏の居城で、そのロココ様式の美しさは、今もなお訪れる者を魅了してやまない。

1. ポツダム

ドイツの首都ベルリンから西南に26キロほどの位置にあり、ブランデンブルク州の州都を務める街である。この街にはハーフェル川が流れ、その周囲にはいくつかの湖が点在している。現在、東西ドイツが統一された後も、ポツダムはその魅力を失わず、多くの観光客を引き

寄せる。ベルリンとはSーバーン(高架鉄道)で繋がれている。ベルリンの郊外都市と言える。

2. フリードリッヒ大王

ドイツの首都、今や世界が知るベルリン。そのベルリン、かつてはプロイセン王国の中心であった。特にヴィルヘルム I 世の時代、普仏戦争での勝利は圧巻であり、宰相ビスマルクはバイエルンのルドヴィック II 世を屈服させ、遂にはドイツを統一し、ドイツ帝国を発足させた。そのプロイセン、戦争の強国として名を馳せ、フリードリッヒ・ヴィルヘルム I 世、通称「兵隊王」として知られる2代目の王は、その名にふさわしい威容を誇った。

だが、その威厳に満ちたプロイセン王室の紋章はどうか。図1に示されるように、裸体の男たちが槍を手にとつ姿は、野蛮の極みと言えるだろう。フリードリッヒ II 世(写真1)(写真2)の父、あの「兵隊王」フリードリッヒ・ヴィルヘルム I 世は、芸術の素養を持たぬ無骨者であったが、母ゾフィー・ドロテアは英国王ジョージ1世の娘として洗練された宮廷人であった。ここに見られる親子の対立、王子フリードリッヒにも大きな影響を及ぼしたのだ。



図1 プロイセン王室の紋章

写真1 フリードリッヒⅡ世像
(ブランデンブルグ・プロイセン博物館にて筆者撮影)



幼きフリードリッヒ、読書を愛し、音楽の才能に恵まれ、フルートを奏できればプロ並みの腕前を誇った。彼は農工業の保護育成を推進し、拷問や検閲を廃止、宗教寛容令を発布した。そしてポツダムにサンサーシ宮殿を建設し、そこで哲学者ヴォルテールをフランスから招いて共に生活し、フランス語や啓蒙思想を学んだのである。「君主は国家第一の下僕である」と称し、教育奨励を行ったこの王、しかしオーストリア継承問題にも介入し、シュレジエンという鉱工業地帯を手中に収め、プロイセンの強国化を実現した。その結果、彼は国民から「フリードリッヒ大王」として尊敬を集め、そして、ジャガイモという新たな食糧を南米から導入し、ドイツの主食としての地位を確立させたのである。フリードリッヒⅡ世は、35歳から亡くなる74歳までのほとんどをこの宮殿で過ごした。その場所は、石段の上に広がるブドウ園の頂に建ち、下から見上げるその姿は圧倒的な美しさを誇る。しかし、彼がこの場所を選んだ理由は、その美しさからだけではなかった。

ベルリンで皇太子として過ごした時代から、彼の周りには美人スパイが送り込まれるなどしたため、彼は人嫌いとしても知られていた。ベルリンを離れ、このサンサーシに身を置いたのは、そんな複雑な背景があったからだ。彼は、死後もベルリンには戻りたくないと願い、自らが愛した11匹の飼い犬と共にこの宮殿に埋葬されることを望んでいた。

しかし、彼の願いに反して棺はまずポツダムの教会に葬られ、さらに戦争末期にはチューリンゲン州、そして彼の先祖が築いたホーエンツォレルン城へと移された。長い旅路の果てに、1991年のドイツ統一後、ようやくサンサーシへ戻り、彼は愛犬たちと共に永遠の眠りにつくことができたのだ(写真3)。



写真2 ベルリンのウンター・デン・リンデンのフリードリッヒⅡ世の騎馬像



写真3 サンサーシ宮殿前の簡素なフリードリッヒⅡ世の墓、墓標の上にじゃがいもが設置され、飼い犬11匹と共に眠る。



写真4 ツエチリエンホーフ宮殿



写真5 アインシュタイン塔



写真6 オランダ破風を持つ住宅群

3. 西邨知一氏が持ち帰った絵葉書

フリードリッヒ大王は自分の在位期間にプロイセンの権勢を誇示するためにポツダムに沢山の宮殿や建物をあたたかもテーマパークのように建設した。ポツダムには第二次世界大戦の戦後処理を決めるポツダム会議が行われたツェテリエンホーフ宮殿(写真4)やメンデルゾーン設計のアインシュタイン塔(写真5)、オランダ風住宅群(写

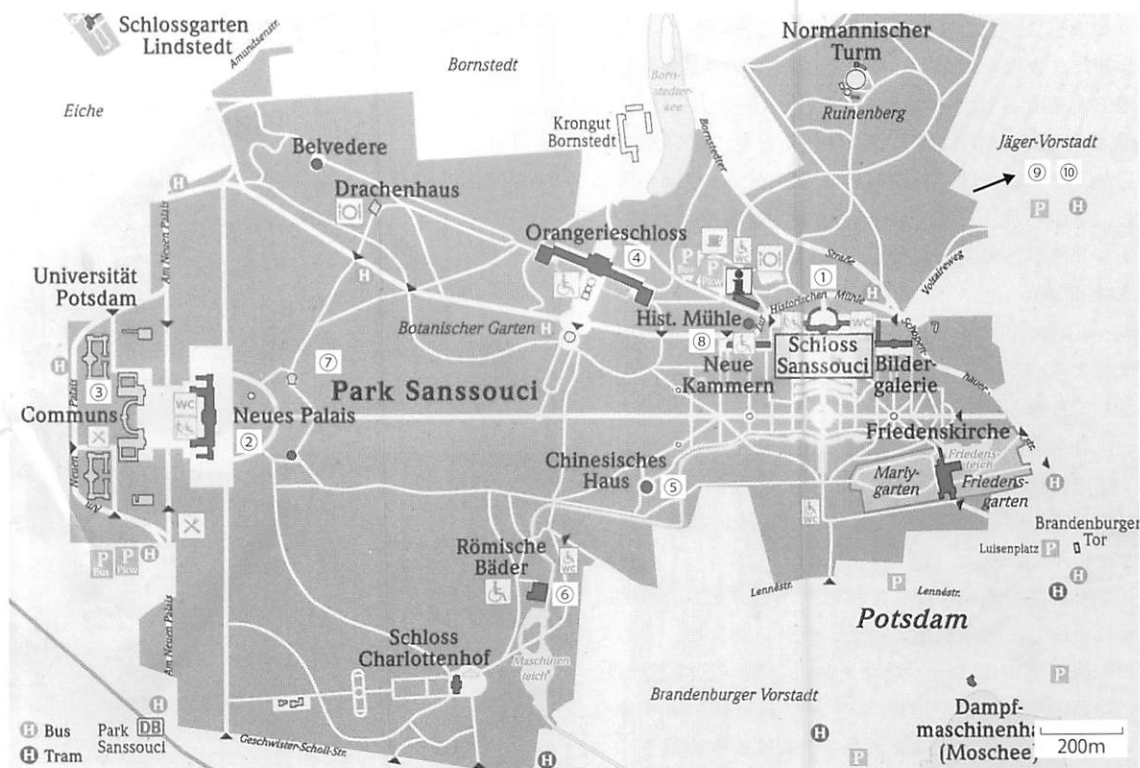


図2 ポツダム・サンスーシ敷地図

Blühende Magnolien auf der Terasse des Schloss Sanssouci auf
neue Kammern und Historische Mühle
木蓮の花咲くサンスーシー宮殿のテラスから新しい小部屋と
歴史的風車を望む

1927年の絵葉書



2024年7月撮影



図3 サンスーシー宮殿

Blick von der Säulenhalle der nördlichen Communs, Nach einem
Aquarell von Karl Graeb um 1850

カール・グレイブにより1850年頃に描かれた水彩画
列柱のホールから市内北部の眺望

1927年の絵葉書



2024年7月撮影



図4 新宮殿列柱の空間

真6)など有名建築物が存在するが、それらは西郷知一氏が持ち帰った絵葉書には含まれていない。絵葉書の内容はフリードリッヒ大王時代に建設された宮殿や建築物であった。絵葉書の建物、宮殿は非常に広い場所に点在していた。図2にポツダムサンスーシーの敷地図を示す。ここに①はサンスーシー宮殿、②は新宮殿柱廊のある凱旋門、③は新宮殿、④はオランジェリー宮殿、⑤は中国の家、⑥はローマ風呂、⑦はアウグスタ・ヴィクトリア皇后の墓所、⑧は歴史的風車、⑨⑩はこの地図から飛び出し、矢印の方向に大理石の宮殿とフィングストベルクが存在する。絵葉書の写真(もしくは絵画)を元に、現状を写真に収めたが、標準レンズで撮影できるもの、広角レンズが必要なものなどあり、現地でのレンズ交換など撮影には苦労した。図3～図16に絵葉書の写真(もしくは絵画)と現状を示す。図の左側に絵葉書、右が現状(2024年7月撮影)である。

図のタイトルは絵葉書についていた説明をそのままドイツ語で示した。その和訳をドイツ語のタイトルの下に示した。

4-1 サンスーシー宮殿

フリードリッヒ大王が残したこの宮殿は、ただの美術品ではなく、彼の人生そのものを映し出す鏡である。ベルリンを遠ざけ、フランスに憧れ、孤独と美の中で生きた彼の姿が、この「無憂宮殿」には確かに刻まれている。図3にサンスーシー宮殿を示す。ここに「小部屋」という表現がある。しかしこの絵葉書には小部屋は存在しない。恐らく絵葉書製作時のミスであろう。図14にも「小部屋」の表現があり、ここには小部屋が存在している。恐らく、この小部屋とはサンスーシー宮殿の管理棟であったののではないかと推測される。

4-2 新宮殿柱廊のある凱旋門

この建物は新宮殿の更に西側にあり、隔離距離は150m程度である(図4)。

4-3 新宮殿

ノイエ・パレー(新宮殿)は、ポツダムのサンスーシー公園の西側にある宮殿である。この建物は、七年戦争¹⁾の終結後、1763年にフリードリッヒ大王のもとで建設が始まり、1769年に完成した。プロイセンにおけるバロック様式の最後の重要な宮殿建築とされ、フリードリッヒⅡ世好みの主要な作品の一つと考えられている(図5)。部屋数は200以上あり、中でも貝殻で室内装飾を行った「貝殻の間」は見ごたえがある。「貝殻の間」は1階に1室、2階に1室ある(図6)(図7)。新宮殿内のjaspis画廊も室内装飾が見事である(図8)。絵葉書には新宮殿屋上から見た町の眺望の絵があった。しかし一般見学者は屋上に出ることは許されず、やむなく、新宮殿の3階から町の写真を撮って比較した(図9)。

4-4 オランジェリー宮殿

オランジェリー宮殿、または新オランジェリーと呼ばれるこの建物は、フリードリヒ・ヴィルヘルムⅣ世(写真7)によって、彼の居住都市ポツダムにおいて、1851年から1864年にかけてボルンシュテットの丘陵、サンスーシー公園の北端に建設された。彼のスケッチを基に、建築家フリードリヒ・アウグスト・シュテューラーとルートヴィヒ・フェルディナンド・ヘッセがイタリア・ルネサンス様式の建物の設計を行った。オランジェリー宮殿には、ルネサンス画家ラファエロの作品の複製を展

Potsdam-Sanssouci, Das neue Palais von Nordosten
ポツダム、サンスーシー東北側からの新宮殿

1927年の絵葉書

2024年7月撮影



図5 新宮殿

Neues Palais Muschelsaal, Nach einem Aquarell von Karl Graeb
um 1850

カール・グレイブにより1850年頃に描かれた水彩画、
新宮殿、貝殻の間

1927年の絵葉書

2024年7月撮影



図6 新宮殿、貝殻の間1階

Neues Palais Muschelsaal, Nach einem Aquarell von Karl Graeb um
1850

カール・グレイブにより1850年頃に描かれた水彩画
新宮殿、貝殻の間

1927年の絵葉書

2024年7月撮影



図7 新宮殿、貝殻の間2階

Neues Palais „jaspis“ Galerie, Nach einem Aquarell von Karl Graeb
um 1850

カール・グレイブによる1850年頃に描かれた水彩画、新宮殿
Jaspis画廊

1927年の絵葉書

2024年7月撮影



図8 新宮殿 jaspis 画廊

Blick von dem Dach des neuen Pallais auf die Communs, Nach
einem Aquarell von Karl Graeb um 1850、1850年頃カール・グレイ
ブにより描かれた水彩画、新宮殿屋上からの市内眺望

1927年の絵葉書

2024年7月撮影



図9 新宮殿屋上からの眺め

示する絵画の間、ゲスト用アパートや使用人の住居があり、一部は博物館として利用されており、サンスーシー公園の異国の鉢植え植物を冬の間に保管するためのホールもある。オレンジリー宮殿は、ベルリン＝ブランデンブルク・プロイセン宮殿・庭園財団(SPSG)によって管理されており、1990年からユネスコの世界遺産に登録されている(図10)。

図10に見るように建物は絵葉書と2024年7月の様子は同様であるが、前面の公園は現在別の形で整備され大部異なっている。

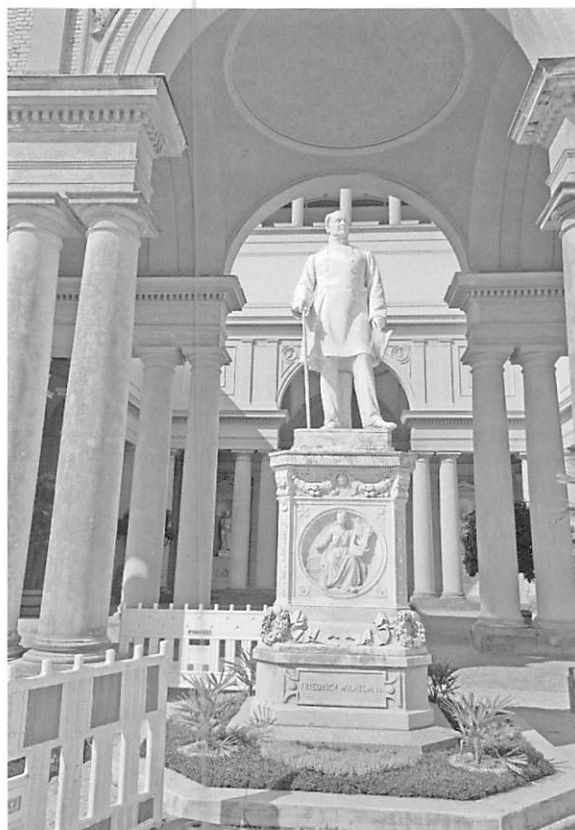


写真7 オランジェリー宮殿を建設したフリードリッヒ・ヴィルヘルムIV世

Die Orangerie bei Sanssouci nach dem ersten Entwurf, Nach
einem Aquarell von Karl Graeb um 1850
カール・グレイブにより1850年頃に描かれた水彩画
サンスーシー近郊のオレンジリーの最初の計画

1927年の絵葉書

2024年7月撮影



図10 オランジェリー宮殿

Potsdam Sanssouci, Chinesisches Haus im Herbst
ポツダム、サンスーシー、秋の中国の家

1927年の絵葉書

2024年7月撮影



図11 中国の家

4-5 中国風建築

この建物は中国風の家、または中国風の茶館としても知られている。ポツダムのサンスーシ公園にある庭園パビリオンである。フリードリッヒ大王は、この建物を彼の装飾的および実用的な庭園を飾るために、サンスーシの夏の宮殿から南西に約660メートルの場所に建設させた。この建設計画は、王のスケッチに基づいて建築家ヨハン・ゴットフリート・ビューリングが担当し、1755年から1764年にかけてロココ様式の装飾的要素と東アジアの建築様式を融合させたシノワズリ²⁾の時代趣味に基づくパビリオンを完成させた。9年に及ぶ異例の長い建設期間は、七年戦争¹⁾によって引き起こされたもので、この戦争でプロイセンの経済的および財政的状況が著しく悪化した。戦争が終わった1763年になって、ようやく庭園パビリオン内部の部屋が装飾され、この建物は装飾的な庭園建築としての機能に加え、時折小規模な祝宴のための異国風の背景としても使用された。当時西欧では優秀な陶器が中国から伝わり、中国に対してある種のあこがれを持っていた。しかし実際に見たことのない中国人を表すのは困難で、ここの中国人は西欧人の顔をしている。(図11)

4-6 ローマ風呂

ローマ風呂(ドイツ語: die Römischen Bäder)は、ポツダムのサンスーシ公園内、シャルロッテンホーフ宮殿の北東に位置し、その創設者であるプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世の南国「イタリアへの憧れ」を反映している。1829年から1840年の間に、古典的なローマやアンティークなイタリアの様式が融合され、建築的な集合体が創り出された。筆者訪問時はローマ風呂は周

Potsdam Sanssouci, Pargola am Römischen Bad
ポツダム、サンスーシー、ローマ風呂のパーゴラ

1927年の絵葉書

2024年7月撮影



図12 ローマ風呂

囲も含めて改修工事中であった。工事現場のフェンスが張り巡らされ、写真撮影も不可能であった。ここで示す写真は三脚を使用し、カメラをフェンスの上に出し、セルフタイマーで撮影したものである(図12)。

4-7 古代寺院・アウグスタ・ヴィクトリア皇后の墓所

アンティーク寺院(Antikentempel)は、ポツダムのサンスーシ公園西部にある小さな円形の寺院である。フリードリッヒ大王は、自身の古代美術品、コイン、宝石のコレクションを保管するために、この建物を建設した。1768/69年にカール・フォン・ゴントアルトが、新宮殿の近く、メインアベニューの北に位置するこの建物を、アベニューの南軸上に建てられた友情寺院(Freundschaftstempel)の対になるように設計した。1921年以来、このアンティーク寺院はホーエンツォレルン家の家族のための霊廟として使用されており、一般公開はされていない。ドイツ帝国最後の皇帝ヴィルヘルムII世の妃であるアウグスタ・ヴィクトリアはここに葬られている(図13)。キリスト教国のプロイセンで教会でなく、寺院と称していることに違和感を感じる。これは後述する建築家カール・フリードリッヒ・シンケルが



図13 古代寺院、アウグスタ・ヴィクトリア皇后の墓所



図14 歴史的風車



写真8 ブランデンブルグ地方の平原で行われている風力発電

ギリシャ建築を模して沢山建築を創ったように、当時のプロイセンはギリシャやイタリアにあこがれを持っていた。ギリシャでは寺院に故人を埋葬した事からここでも寺院と呼ばれたのであろう。

4-8 歴史的風車

新宮殿サンズーシー宮殿の風車は、ドイツで最も有名な風車の一つである。この風車には、フリードリヒ大王が風車の騒音に悩まされ、製粉業者のグレーヴェニッツに風車を取り壊すよう求めたという伝説がある。しかし、製粉業者が裁判所に訴えたと脅したところ、王はその製粉業者の進言を受け入れ、風車は存続することになったそうである(図14)。

1738年に建てられた元の木造風車は老朽化のため取り壊され、オランダ風の風車に建て替えられたが、第二次世界大戦で破壊された。1993年以降、サンズーシーの歴史的な風車の羽が再び遠くからも見えるようになり、現在はベルリン・ブランデンブルク風車協会によって運営されている。1738年から風力利用を行ってきたドイ



図15 大理石宮殿

ツでは現在も風力発電など自然エネルギー利用に熱心である。ブランデンブルグの平原で行われている風力発電の様子を写真8に示す。

4-9 大理石宮殿(マルモア宮殿)

マルモア宮殿は、ポツダムのノイエングルテン(新庭園)にある宮殿で、図2に示す地図には示されず、地図のさらに北東に位置している。それはプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルムII世の夏の宮殿であった。建築家カール・フォン・ゴントアル、カール・ゴットハルト・ランガンズ、ミヒャエル・フィリップ・ボウマンによって、1787年から1793年、そして1797年にかけて、ヨハン・アウグスト・アイザーベックが設計したイギリス風の庭園の中で、湖のほとりに建てられた。(図15)

4-10 フィングストベルク

フィングストベルクは、標高76メートルで、ポツダムの中でも最も高い丘の一つであり、特にそのベルヴェデーレ(展望館)で知られている。このベルヴェデーレは、フリードリヒ・ヴィルヘルムIV世がイタリアの建築様式

Das Luftabschloß auf dem Pfingstberg mit Blick auf die Stadt Potsdam
ポツダム市街を見下ろすフィングストベルクの空中の城

1927年の絵葉書



2024年7月撮影



図16 フィングストベルク

に倣って、ルートヴィヒ・ペルシウス、フリードリヒ・アウグスト・シュテューラー、ルートヴィヒ・フェルディナンド・ヘッセの3人の建築家に依頼し、1863年までに建設したものである。庭園風の公園は、ペーター・ヨーゼフ・レネの設計に基づいて造られた(図16)。

フィングストベルクにはベルヴェデーレのほかに、1801年に建てられたボモナ神殿がある。これは当時わずか19歳だったカール・フリードリヒ・シンケル³⁾による最初の建築作品である。

第二次世界大戦後、この展望館は廃墟となり、庭園は次第に荒れ果てていた。しかし、1980年代末から、一つの団体がこの施設の修復に努めており、ベルリン＝ブランデンブルクのプロイセン宮殿・庭園財団や多くの寄付者の支援を受け、2003年までに公園と城館は大部分が修復・再建された。

おわりに

この文章の一部は2024年8月29日に明治大学駿河台校舎で開催された日本建築学会大会学術講演会で報告を行ったものである。

今回の調査で、筆者は現地での写真撮影にも多くの困難を伴ったが、その成果をここに示すことができる。絵葉書の左側には当時の姿が、右側には2024年7月に撮影された現状が映し出されている。それぞれの建物がどのように保存されているのか、その姿を皆様にお伝えすることができるのは、筆者にとって大きな喜びである。

プロイセンの建築文化に焦点を当てた内容となった。1927年に持ち帰られた絵葉書が色褪せず残っており、当時のドイツの印刷技術の優秀さに驚く。ポツダムは第二次世界大戦後東独に属していた。東独は社会主義の思想でドイツ帝国の遺産には興味を示さなかった。という

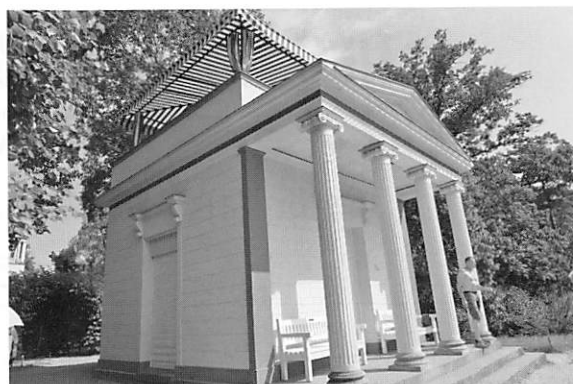


写真9 カール・フリードリヒ・シンケルの19歳における作品「ボモナ神殿」(1801年)

より、資金がなかった。それが東西ドイツ統一後ドイツ政府は旧東独の主要都市であるポツダム、ドレーズデン、ライプツヒヒ等に資金を導入し、復興に努めた。昔の文化財を大切にし、忠実に修復を行っていることに敬意を表す。2024年7月に行った現地調査ではDr. Axel Jahnのお世話になった。記して謝意を表す。

註

1. 七年戦争は、1756年から1763年にかけて行われた戦争で、プロイセン王国とオーストリアの戦争である。フランス、スウェーデン、ロシア、イギリスなども巻き込まれ、大規模な戦争となった¹⁾。オーストリアのマリア・テレジアが戦争を始め、目的はプロイセンに奪われたシュレジエン地方を奪還することであった²⁾。フリードリヒ2世は包囲に苦しみながらも戦争を戦い抜き勝利した。
2. シノワズリは18世紀に欧州で流行した中国趣味の美術様式を言う。
3. カール・フリードリヒ・シンケルは、18世紀ドイツの新古典主義建築を代表する建築家である。ベルリンなどの都市計画・設計においても活躍した。画家、舞台美術家としても知られる。プロイセン王国ノイルピン生まれ。ノイエ・ヴァッヘ、ベルリン王立劇場、アルテスムゼウム等が代表作

〈参考文献〉

1. 田中辰明：「絵葉書に見るヴァイマル共和国時代のポツダム」2024年、日本建築学会大会学術講演会梗概集
2. Jürgen Luh, Dr Große, Friedrich Ilvon Preußen Pantheon
3. Christopher Clark, Wilhelm, Die Herrschaft des Letzten deutschen kaisers PantheonPreussen 1701- 1871 GEO EPOCH
4. Preussen, Der Kriegerische Reformstaat, Der SpiegelSpecial, Nr. 3/2007
5. Preußisches Lesebuch, Bilder - Texte - Dokumente, Unipart